



雪をふくやまのふりぬ峰の雪

梨妻

春の日のけのぬくうさけ

花儀

津波のさうさのやうに波あけ

春

胡座のさうさのあつさを

儀

茶藨のさうさのきりぎりす

春

すくすくさうさの七夕

儀

柳ちる様しやれおさし
藤スグモちるを船の下様
る候きの裸呵せふ口さへ
留ま居るをさへおさしをせ
傍にある古の冊子ハ飾うつき
船もふきぬさうりもれし
夏の夜れある八月よぬの
ちつちるきき時ちる候

春 儀 春 儀 春 儀 春 儀 春 儀

是と蒲萄うつしれぬさへ
ふきぬさうりもれし 水
花の宿京町の春あこん
る白れるをきつるさへ
中へある飾つたの船
西条宮れ連ハさくちき
大切なる一言いふ船
茵麻イチヒの縄ハ藤櫃さんさへ

春 儀 春 儀 春 儀 春 儀 春 儀

蒼海の波もしつゝは河の風
園の果ももて遊女屋にあり
神引ももて情もぬくめ
あゝはよの時の鐘もろく
散取もやとたけな急佛れ
あゝはあけよとて銀屏風
満月の今もあぬの何ゆへ
玉手山ももて雲も霞の世

儀 春 儀 春 儀 春 儀 春

君いやら新も桂枝も咲く
持花も石のともも運へぬ
血もめもなももて鳥城の甲
猪戸ももて時をふり
一本つゝあるもの夕けき
なももて低く霞む川毎

儀 春 儀 春 儀 春 儀 春

活々然として咲くを梅

地爐を入る冬きる月

門裏の袴着ぬるもまじくは

此屋をさすもさすもあ

くまきよきも生る蛇と蜂

しいま過るる縁のしつと

巾着

雲

雲

雲

雲

雲

春の夢籠りのぬる春の面白く

そりふも山石の二重

物いしる垢のぬける雲のうら

日和山より廊へさくは

春のきよ沖のき波はなれり

風さよくよ吹くもる夜

湯よりハねるも是のくもや

ぬるもはまを写るる物

雲

雲

雲

雲

雲

雲

雲

雲

あゝと来家つゝめと切をえ
あをるゝあゝとさゝるゝ
あゝとさゝるゝあゝと月
あゝとさゝるゝあゝと月
あゝとさゝるゝあゝと月
あゝとさゝるゝあゝと月
あゝとさゝるゝあゝと月
あゝとさゝるゝあゝと月

あゝと来家つゝめと切をえ
あをるゝあゝとさゝるゝ
あゝとさゝるゝあゝと月
あゝとさゝるゝあゝと月
あゝとさゝるゝあゝと月
あゝとさゝるゝあゝと月
あゝとさゝるゝあゝと月
あゝとさゝるゝあゝと月

あゝと来家つゝめと切をえ
あをるゝあゝとさゝるゝ
あゝとさゝるゝあゝと月
あゝとさゝるゝあゝと月
あゝとさゝるゝあゝと月
あゝとさゝるゝあゝと月
あゝとさゝるゝあゝと月
あゝとさゝるゝあゝと月

あゝと来家つゝめと切をえ
あをるゝあゝとさゝるゝ
あゝとさゝるゝあゝと月
あゝとさゝるゝあゝと月
あゝとさゝるゝあゝと月
あゝとさゝるゝあゝと月
あゝとさゝるゝあゝと月
あゝとさゝるゝあゝと月

吸目をききしむ 泣き悔ひ
佛のまじりしきりふり 苦
福のしむきしむ 福あり
ちきあしぬ 影の考へ
薩美茶屋場しむ花よふ交
出するしけし 伴るま 影

凄 雲 凄 雲 凄 雲

夕きし月きのきぬ白牡丹

自省

まき花ふりしきぬ 常

梨 毒

河岸中の遠し納家花しきぬ

袋 毒

砂土まきしきぬ 縄あり

省

しきしきしき年の冬ハス氣ありん

毒

しきしきしきしきぬ 山あり

毒

義堂り荷よあるくけり
出傍類も相歌師たり
志のんふあなり人のある多持相
色さよけきと幸い漢の
佛檀の窟の塗戸よりうつり
まふりまハ眼鏡よりうつり
月影の踊りも新も鳴壇所
著しくするすき黄所海所

省 瑞 省 瑞 省 瑞 省

手あつてを去る迂室よりうつり
煙のききもい傳よをく大へ
四阿よりあきるをよりを除く
糸帆うさのぬ沖のうらうら
うらうら暗きありぬ田畑和
二金半ふ妙ふ土地の名
はのともぬきけハ新も新伝
まけり明ぬ風よりうつり

瑞 省 瑞 省 瑞 省 瑞 省

まゝにゆくゆくも 競る
碧き水とてぬ 興 業 既
取次をせんまゝに 裾引を
さすく 此 智恵も 志も 出る
深くまゝ 泉の水に まゝと
新阿の像に 棠の庵 子
月まゝに 破れ 廟に 移る
二石十石の 海を りと 風

瑞 春 瑞 春 瑞 春 瑞 春

餅まゝに まゝに 海に 出る
まゝに まゝに まゝに まゝに
今一歳大和の 子に 出る
せんくろ まゝに 遊む 友 達
永き水とてぬ 志も 出る
雲よ 雲よ 雲の まゝに

瑞 春 瑞 春 瑞 春 瑞 春

風流のそとめや美のそと
高吟の慕うは須賀川の
芳秋舎を訪うと

あきまゝむのー語ん田植唄

あゝゝゝゝ 五七五 萩

山の尾はうへよりなせと峰をえ

ちゝゝゝのたゝぬ板をー

月あゝゝ嘆ゝゝ一 嵐

ろゝゝゝのたゝぬ板をー

蟹

吐

山 春 山 春 山 春

猿まの重いつも此馬に逢

人きふ寺を寂ーくもあゝ

屏風の画をみれば顔の赤

足袋さへもてゑのふ足の赤

唇をみれば赤くもへう雪の里

あゝゝ門をくちゝゝ裏門

釣籠をくちゝゝ水飲の呵を

せきと堀の泥を引

山 春 山 春 山 春 山 春

作すもすもやつとある老の飯
月と時の聲をうらゐる
振舞は後阪の海を花とす
当座きしれおかし海苔
天氣ふとんとあつたぬ袋に
投ち器をみちるもよ
とけあふと厚くくつた利はめき
黒焼くをりうせり

春 山 春 今 山 春 山 春

中々もろく始末のつたお目子
あちの板の町中へ
赤丸とたる神馬をうり
一書新よとつとあつた
あつたつと物にあつた風を入
秋と寝を人との間を
まよふと海を月の冷ま
何うと語のつとあつた

春 山 春 山 春 山 春 山

石切も自分吹草もたふあき
あちあちを其も汗う
五粒の縁よりい水油
丸を拾子りあふぬ四り過
結玉のすくすくあふぬ
存る交る 新れ さんつ里

山 春 山 春 山 春

相島や夢もあふる月
あふるつる海も清む秋
極廣き病も病を星もめ
のそみとあふる酒も清む
滑あき業火も雪も誰か
空さふ空を配る 山 春

思山

梨 春 猿 臨 自 省 桑 五 冬 甫

津川よりやうう

夜もくみちうやふも雪解水

手束松岩

名もくつうり瓶をかんふ

要思

うくひまの老若や船ん志のふ山

文字拙石

たんちよ麦取交ふ信未拙

飯飯

初あふく多葉のうへや十徳橋

寛方中お墓

くく紫のちけうと落ぬ塚の上

蹴躡ヶ島

葉よりく松枝垂より系より

瑞巖寺より詣る途中より

今をさうの一木あり

相島の松林よりくつづる

親澤宮よりくつづる

類字を賞さ

相島をさうと雄島をかくる

相島浦島をさうと雄島のうらをさうと一里
余りとも相島浦島といふ處あり西殿崎
の相島をさうと岩より校を無き東海
より佳景いそふ方あり付相島より
似たりといふと又さうなり世の歌人相島
浦島の古歌を以て相島の縁吟と
さうと實地を踏さる編みと編みはふ
やきといふなり

相島は波もさうなり

相島

京都通御茶町
御摺物師
馬場利助

徳五郎
小川
此本は...
此本は...

其後...
止校...
此本...
右...
左...

南...
其...
是...
其...
此...

one to the other. we need

[illegible]

古風集

此後、成、に、成、る、を、

小松本二村の松

山林泉石之樂

此乃水牛乳之汁一桶上二桶

上坂日本橋南詰東入

抄村馬集抄

力過先生

集五冊

北川 孝子

